

第19回 静岡県福祉文化研究セミナー/日本福祉文化学会中部東海ブロック研修会 研修テーマ： ホットとする、ご近所のささえあいは誰が創る？

開催日時 令和2年10月25日（日）13:00

開催会場 静岡市清水区追分「寄ってっ亭」

1. アイスブレイク：「若者発 ご近所福祉かるた」を活用した自己紹介

- (1) あらかじめ、配布「かるた」（「読み札」と「絵札」）を確認する。
- (2) 「名前」「住所」「居住年数」を紹介し、配布した「読み札」「絵札」の内容に基づき参加者のご近所について「考え方」「実際のご近所の様子」「最近のご近所での出来事」等を含め、5分程度自己紹介する。

2. 「円卓トーク ご近所福祉に関わって一言」

- (1) 「アイスブレイク」の話題をさらに広げて、本音で語る。
- (2) 「若者発 ご近所福祉かるた」からご近所を語る。
- (3) 「ホットとする こんなご近所福祉をめざす」決意表明を語る。

上記の「1. アイスブレイク：“若者発 ご近所福祉かるた”を活用した自己紹介」「2. 円卓トーク ご近所福祉に関わって一言」のそれぞれから、参加者の意見を集約した。

1. 子どもを通じて地域とのつながりが出来るが、高齢者世帯や、単身世帯だと、つながりにくい。
2. 若者が、いかにして年配者となることが出来るか、若者・年配者それぞれの立場で相互理解していくことが求められる。
3. 過去には、どの地域にも、「お節介屋さん」がいた。「お節介屋さん」の復活も、地域で孤立しがちなニーズが生じている今日、その存在も求められるように感じる。
4. 転入転出の多い新旧混住地域（新興住宅／まち部）では、ご近所づきあいの難しさを感じる。こうした、世帯や人の動きが多い地域では、その都度、「紹介し合う」機会を設ける努力をし、お互いに知り合うことに努めている。
5. それぞれ「地域性」があり、真似事はできない。「子育てサロン」を重視しなければならない地域では、若い瀬たちの関りの工夫がいる。
6. いかに地域を「見える化」するか。 **広報誌の発行**に努めているが、こうした領域に関心がないと誰もが出来ものではない。広報誌の発行目的を持ち、地域を知ってもらおう努力をする。
7. 身近な生活圏域において、高齢者の大きな困りごとではなく、小さな困りごとをお互いに出し合い、手伝える環境を創る努力をしている。
8. 居場所は、上から言われてつくるものではない。住民自身が必要と思われて初めて機能する。女性だけのサロンが中心となっている今日の状況下において、男性も居場所を求めている。野外の畑を開墾して、汗をかきながらひと時を過ごす取り組みは意義がある。男性の「花咲き会」、女性の「一善会」が誕生している。 **男性には、屋外型居場所の発想提案**
9. 尊い家庭介護が、今、地域活動に活かされている。住民には、実社会の中で実体験することが大切である。
10. ちょっとボランティアの参加募集をしている。最近では、「ボランティア」の存在が薄い
11. 今では、各地で「子供会」が衰退している状況の中で、「子供会」の関わることで、そこから地

域のことを学び、理解することがある。

12. 子どもたちは、手伝いの機会が少なくなった。意図的に手伝いの機会をつくる家庭環境、地域環境が必要である。
13. 障害のある方々に、地域活動の参加できる機会を地域社会で創ることが必要である。
14. 「身内福祉」抜きにして、「他人福祉」はあり得ない。 **基本は足元福祉**
15. 地域のきめ細かなふくし課題を専門領域につなぐ「**トータルコーディネート機能**」を果たせる人材が求められる。 **地域の介護事業所等の組織化**をはかり、地域社会に向けた働きかけをして、地域全体の「福祉力」を高める仕組みが必要 **専門性と市民性の融合**
16. 個人の福祉ニーズをもって課題解決する仕組みから、**家庭・家族を単位とした福祉ニーズへの対応**が今日必要となっている。
17. **個人情報保護やプライバシー問題**が先行してるため、なかなか本格的な課題解決に至らない。専門家集団では「調整会議」等が挙げられているが、**当事者にとって、改善解決には何が必要かの本心をしっかりと把握していくことが大切である。**
18. 問題があれば、専門機関を紹介する今の仕組みの中で、一番必要なことは、**日常的に、近隣地域が語れる環境を創ることが大切である。**
19. 「介護保険はお守りにしたい」と、若者に向かって言い続けてこられた「大石さきさん」（103歳で他界・おばあちゃん劇団主宰）。
今の長寿者は、あまりにも、社会や家族に甘えている。もっと、保護的、依存的な考えから脱皮しなければと訴え続けてこられた。 **長寿者の自立が必要だ。**
そして、地域社会や長寿者を取り巻く**世代の歩み寄り**が求められている。
20. 長寿者は、常に援助が必要だとした視点で社会が認識している。
長寿者にも役割を持つ社会の仕組みが必要である。 **見守りされるだけではなく、見守る役割の出来る。**こうした地域参加の機会を誰が創るかである。
21. 生活圏域において、身近な福祉問題を語り、そこから発見し、改善解決につなげる仕組みは、決して、専門領域だけの取り組みとしないで、地域コミュニティ組織の中にしっかりと組み入れていくことが重要である。 **地域組織化の再構築**
22. **地域住民の意見や声を（ニーズ把握）常に把握していく地域コミュニティ組織運営の確立**が求められている。 **身近な地域の組織団体間調整連携の構築が問われる。**
23. 出来る限り、**住民の生活圏域に近いささえあいの仕組み**を構築していく努力が必要である。
24. 理想は「向こう三軒両隣」の精神である。
25. 学校教育領域では、学校教育目標に「思いやる心」が合致していることから、児童生徒は、それなりに、成長とともに発達段階に応じた「福祉の心」は養われている。地域も積極的に学校に働きかけて、学校教育（理論）で学んだことをご地域社会で実践できる「**学びは地域全体**」を問う。しかし、大人社会となると、ほとんど一般社会では「教育」という仕組みはなくなり、どのようにして「**教育と福祉の融合**」が、実社会の中で役割を担っているのか不透明である。
30代から50代の住民の意識と実態は、地域社会から離れた現状ではないかと危惧する。
「教育」とりわけ「**地域ぐるみの福祉教育の再構築**」が求められている。
26. これまでの「調査データ」から、何らかのかたちで、「地域の呼びかけがあれば参加する」気持ちの住民は7割から8割胃愈回答である。
27. 一貫した身近な「地域コミュニティ組織」にも、単年度や役員が変われば活動が変わる発展しない活動体ではなく、真に「住民主体」の活動が維持され、発展していくための「**小地域活動計画**」の取り組みを働きかけたい。